

異文化コミュニケーション としての応用哲学

応用哲学会第一回大会
シンポジウム「これが応用哲学だ！」提題
伊勢田哲治

アウトライン

- 応用哲学とは何か
- 応用哲学者としての伊勢田
 - 科学と疑似科学の線引き問題
 - 技術者倫理の動機づけの問題
- 応用哲学者の直面する問題
 - 関心の食い違いの問題
 - 哲学者の有用性の問題
 - 研究の質の保持の問題

誰にむけての提題か

- このシンポにはいろいろな人が来ていると推測される
 - すでに応用哲学を実践している人が応用哲学の今後について一緒に考えるために
 - 応用哲学にこれから関わりたいという人がどういものか知るために
 - 応用哲学に関わる気はないが単なる好奇心から
 - 応用哲学に関心はないがたまたま通りかかったので
 - とにかく茂木さんの顔を見にきた

誰にむけての提題か

- このすべてのタイプの人に何らかの意味で満足してもらえるような話をするのが理想であるがそれは私には無理
- なのでとりあえず応用哲学をすでにやっている人と応用哲学に関心があるがどういものかよくわからない、という人を主に想定して、他のタイプの人にも何かしら得るものがあるような形で話をしたい

本提題の視点

- 応用哲学を一種の異文化コミュニケーションの試みとして捉える
- 私自身が関わってきた応用哲学の分野を例にとりつつ、応用哲学者の直面しがちな問題を、異文化コミュニケーションという観点から捉え直す

応用哲学とは何か？

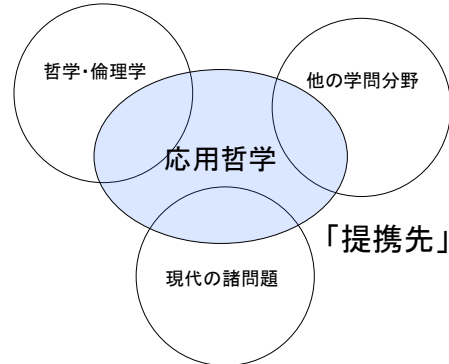
Q. 応用哲学とは何ですか、応用倫理とは違うのですか。

A. 「応用哲学」に何が含まれて何が含まれないかについては準備委員の間でも意見の一致があるわけではありません。この言葉にどうい内実を与えていくかはこれからのこの学会の活動次第でしょう。規約案では、応用哲学について「哲学と他の学問分野にまたがる学際的研究、現代社会の諸課題に深く関わる研究を中心とする」つ、それらの研究活動を支える現代哲学の基礎的な研究をも包摂する、広義の応用哲学」と説明されており、大まかなイメージとして、**現代のさまざまな問題や、さまざまな学問分野と関わりあう現代的・学際的な哲学のありかた**を「応用哲学」と呼ぶことについては準備委員の間で了解があります。現代の問題を扱う応用倫理はもちろんこの意味での応用哲学に含まれますが、他にもさまざまな形の応用哲学があります。たとえば物理学の実践の中から問題を発見する物理学哲学、コンピュータサイエンスや数学と融合した論理学、言語学の知見を積極的に取り入れる言語哲学、アーティストとコラボレートする芸術学哲学、技術者と哲学者が協力して作り上げる技術哲学、哲学の思考法を応用するクリティカルシンキングなどもそれぞれ上記の意味で「応用哲学」と呼べると思います。もちろんこれらは単なる例です。これらの例にとどまらないさまざまな応用哲学の形を提案してくださる方を当学会では歓迎します。

応用哲学会ホームページに掲載されていた文章より

応用哲学とはなにか？

- 細かいことをぬきにすると
現代のさまざまな問題や、さまざまな学問分野と関わりあう現代的・学際的な哲学のありかたを応用哲学と呼ぶことにしたい
- この意味での応用哲学はもちろん哲学者の側からも、哲学に関心を持つ異分野の立場からも、あるいはいずれにもアイデンティファイしない立場からでもできる
- 本提題ではもっぱら哲学者としてさまざまな問題や分野（以下「提携先」と呼ぶ）とかかわりあおうとするということについて考える。



「応用」という言葉について

- 「応用」(applied) という言葉にはある分野で確立したものを一方的にあてはめるといふニュアンスがあるが、応用倫理学ではそういうニュアンスは抜きで応用という言葉を使うのが通例になっている。
- 哲学から相手の分野への影響があるとともに、相手の分野から哲学への影響もあるのが応用哲学。

哲学者が応用哲学に首をつっこむ理由

- 哲学的な問題意識の自然な延長として
 - 「テツガク的」問題に魅力を感じなくなった結果として
 - 時代の要請や提携先分野からの要請に応えるため
 - 哲学の生き残りのため
 - 就職の対策のため
 - 研究予算をとってしまったから
- 私自身にもこのすべてがあてはまる

応用哲学者としての伊勢田

- 伊勢田の主な研究分野：科学哲学、倫理学
 - 科学哲学
 - 「科学についての哲学」という分野そのものが応用哲学
 - 伊勢田の守備範囲は科学的実在論の問題、科学的証拠の問題、科学と疑似科学の線引きの問題など
 - 倫理学
 - 倫理学の中でも応用倫理学は応用哲学の代表的な領域
 - 伊勢田の守備範囲は技術者倫理、動物倫理、情報倫理など
 - その他
 - 哲学的思考法の実用としてのクリティカルシンキング教育など

科学哲学からの例：線引き問題

- 科学と疑似科学の違いは何か、両者を区別する基準は？
- 話題そのものは1930年代にカール・ポパーが提起して以来の由緒正しい(純粋)科学哲学の基本問題の一つ。
- しかし近年の「ニセ科学」的言説をめぐる論争などでは科学をどうとらえるかという話題が避けて通れない定番の話題となっている。

反証可能性とその失敗

- 反証可能性基準(カール・ポパー)
 - 反例を想定しうること(どんな不利な証拠が来てもいいのがれできるというような構造になっていないこと)が科学的な仮説の最低限の要件
 - 反例が実際に見つかったら仮説を放棄するのが科学的な態度
- しかし、実際にポパーの言うようなやり方では科学の営みは成立しない

現在の科学哲学における線引き問題

- ポパーのあとにもいくつかの線引きの基準が提案されてきたが、科学史のさまざまな事例を見る限り科学の必要十分条件を与えているものは一つもない。
- 現在では、多くの科学哲学者が線引き問題は不毛な問題設定だったと考えている。

応用問題としての線引き問題

- しかし、アメリカで進化論に対して創造科学や知的設計説を公立学校で教えようという運動が起きる中で、科学哲学の中で行われてきた線引き問題についての論争が社会的含意も持つようになってきた。
- 知的設計説などが本質的に科学とはいえないと主張する根拠が科学哲学に求められる。

応用問題としての線引き問題

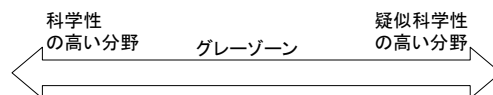
- 日本では創造科学などの影響はまだたいしたことではないが、物理学者らによる「ニセ科学批判」が注目をあつめたりしている。
- 具体的には「水からの伝言」をめぐる論争など。
 - 水に「ありがとう」という言葉を見せるときれいな結晶に、「ばかやろう」という言葉を見せるときたない結晶になる、という趣旨の『水からの伝言』という写真集が作られ、道徳教育の現場で用いられたりしている。

応用問題としての線引き問題

- この状況で科学哲学の側が「科学と疑似科学の線は引けません」と言って話を終わらせるだけではかえって「ニセ科学」の側に利用される可能性もある。
- 線は引けなくても、科学の信頼性を保証しているさまざまな特徴を指摘すること、そうした信頼性の度合いについて考えることはできる。(反証可能性はじめこれまで提案された線引き基準もその目的には十分役立つ)

「線を引かない」解決

- グレーゾーンはあっても科学性の高い分野、疑似科学性の高い分野は区別でき、たいていの実践問題を考える上ではその程度でも十分。



応用哲学者の直面する問題

- 応用哲学者が直面しがちな問題は多いが、ここでは以下の三つに話をしぼる。
 1. 関心の食い違いの問題
 2. 哲学者の有用性の問題
 3. 研究の質の保持の問題

1 関心の食い違いの問題

- 哲学と提携先の関心が一致して応用哲学がはじまるという幸せな状況は必ずしも一般的ではない
- 特に哲学的関心の延長として他分野との提携を考えると、関心の齟齬は問題を生む
- 提携先の人、特に哲学との連携に積極的な人が哲学に対して持つイメージや哲学に期待するものが哲学の側からの問題意識とまったく違うこともよくある

1 関心の食い違いの問題

- 線引き問題に関して言えば
 - 哲学者はとりあえずなんでも疑ってみるというスタンスから科学の特徴付けについては消極的になりがち。
 - 科学の必要十分条件を考えるという問題設定からは、必要十分条件がないと分かれば話は終わり
 - しかし実際問題においては実は必要十分条件はどうでもよい。十分役に立つ目安を持つことの方がよほど大事

1 関心の食い違いの問題

- 同様の問題は応用倫理でも発生する。
 - 倫理学者は倫理的ジレンマや境界の設定など、意見の分かれる判断の難しい問題に興味がいきがち。たとえば技術者倫理では内部告発の是非といった話題が倫理学者の関心を引く。
 - これに対して実践の場では、むしろすでにどうあるべきかがはっきりしている問題について、それをどう実現するか、教育するかといったことが問題になることが多い。
 - 技術者倫理でいえば、安全が最優先されるということについては誰も異論はないが、どうやったら企業や技術者が安全を実際に最優先するような仕組みや教育が可能かということの方が重要で、内部告発のような例外的問題はむしろ周縁的。
- 「哲学者は期待に応えてくれない」「哲学者は役に立たない」といった評価をうけてしまう。

1 関心の食い違いの問題

- しかし、実践的な問題に適用できるものの方が必ずしも優れているわけではない。実践的であるために主張の確実さ、一般性、慎重さなどがトレードオフされることも多い。(少なくとも私にとっては哲学の関心のそういう側面が大事)
- 科学の必要十分条件を求めるといった問題設定や、そんなものはないという答えにも科学の本質の理解という文脈では意味があるし、倫理的ジレンマに関心を集中させるのも倫理の本質を知る上では重要。
- こういうスタンスをとる際に大事なのは、お互いの問題設定を理解して、相手の出した結論を利用する際もその問題設定の文脈をふまえて必要な翻訳を行うこと
→一種の異文化コミュニケーション

1 関心の食い違いの問題

- 提携先の分野の人に「何それつままない」と言われて、哲学的な問題関心の有意義さに自信を失ったり、あるいは提携先の分野に内在する問題関心から出てくる研究こそが真の応用哲学だと思うようになったりする人もいよう。
- もちろんそういう動機で実践問題に関わる哲学者が出てくるのはけっこうなことである。
- しかしどちらの問題関心が優れているかとか真の応用哲学かというのは不毛な問いではないか？

2 哲学者の有用性の問題

- 哲学の研究はもともと何かの問題に答えを出すような性質のものではないため、哲学の本来の研究手法に忠実であればあるほど、提携先の問題関心に「役立つ」ということは少なくなる。

2 哲学者の有用性の問題

- この問題に対して哲学者がしばしば挙げるのは、哲学の得意分野での有用性
 - 曖昧な概念や多義的な概念を分析し、明確化・区別を行う
 - 議論の構造を明確にし、暗黙の前提を明るみに出す。
 - 価値判断と事実判断をよりわけける
 - 自明の前提となっているものをあえて疑問に付す
 - 哲学理論や古典についての知識

2 哲学者の有用性の問題

- 哲学者が本当にこうした点で他の人より高いスキルや知識を持ってるかどうかは疑問だが、その点は一応ここでは問わない(むしろ哲学者が持つべきもの、持つのが望ましいものと捉えるべきか)
- それ以上に問題なのは、哲学者のスキルや知識が生きるような問題に提携先の人たちが関心を持つかどうか。

2 哲学者の有用性の問題

- もし創造科学や近年話題のさまざまな「ニセ科学」がどの程度科学かについて実際の判断を下すことに関心があるなら、科学の概念についてそれほど細かい分析が必要なわけではない。
- 技術者にどう倫理教育するかに関心があるとき、安全という概念を細かく分析するかそもそも安全がなぜ大事かを深く深く掘り下げることは求められていない。

2 哲学者の有用性の問題

- 一つの行き方は、提携先の問題関心にそって、哲学者としてのスキルを封印して考えること
→単に「素人が口をはさんでいる」以上のものでなくなる可能性も高い。

2 哲学者の有用性の問題

- もうひとつの行き方は、哲学のスキルが生きるような問題設定を応用哲学からの視点として提案し、その問題については哲学も役に立つ、と提案すること
- たとえば解決ではなく問題への理解を深めたり、誰も気づいていない可能性を発見すること
 - 「たしかにあなたには興味がない問題かもしれませんが、他の興味の持ち方もあるんですよ」という形で訴えるというやり方はある？
 - 自分が異文化であることを意識して、異文化として哲学の関心やスキルを提携先に提示する
 - こうした相互認識をふまえることが結局有意義な共同研究にもつながるはず

3 研究の質の保持の問題

- 応用哲学の研究は「なんでもあり」になってしまいがち
- 周囲から「トンデモ」だと思われることで、応用哲学における(哲学研究として、あるいは提携先のニーズに応えるという意味で)着実な研究までいかがわしく見られてしまう。

3 研究の質の保持の問題

- 科学哲学における線引き問題については現在そもそもやっている人が非常に少ないのであまり質は問題にならない。
- 応用倫理領域では怪しげな研究の例は多いような気がする(根拠のはっきりしない価値判断、基礎的な事実を無視した実践的提案etc.)

3 研究の質の保持の問題

- しかし、性急に研究の質の向上を求めることは、異文化コミュニケーションとして応用哲学を考えるならむしろ有害でありうる。
- 問題設定が違えばどういう研究が質が高いかについての判断も食い違う。
- 「応用哲学会」のような提携先を特定しない学会では統一的な基準を持つことは絶望的

3 研究の質の保持の問題

- しかし、研究の文脈が固定されれば、その文脈においてどういう研究がよい研究なのか、最低限どのくらいの基準を満たさなければちゃんとした研究としてみなされないかということについては比較的はっきりした基準がありうる。

3 研究の質の保持の問題

- 生産的な関係を保つには、お互いの関心や文脈をお互いに明示しあうこと、相手の関心や文脈について想像力を働かせ、知識を持つことが大事(要するに一般の異文化コミュニケーションで求められることと同じ)
- 関心や文脈の差に寛容であることと、その文脈の中で厳しい相互批判を行うことは十分両立しうる
- 異文化コミュニケーションというスタンスをふまえる事が、結局生産的な形で研究の質を向上させていくことにつながるはず。

3 研究の質の保持の問題

- たとえば応用哲学をする脳科学者が**脳科学者として**行う発言は**脳科学という文脈で**批判的に吟味されるし、**応用哲学者として**行う発言は、**関連する哲学の文脈で**批判的に吟味される(ということでもいいですよね?)

まとめ

- 応用哲学は哲学と提携先の間に関わりとして成り立つ学際的分野。哲学から応用哲学へ行く際の関心はさまざま。
- 関心の食い違い、有用性についての疑問、研究の質の保証の問題など、応用哲学者が直面する問題は多い。そうした問題に対処する上で心にとめておくべきことは、応用哲学が異文化コミュニケーションの場だということ。
- この提題自体も応用哲学そのものを対象とした応用哲学の試みです。